



パ・ド・トロワ・アンコール

ENCORE

Pas de Trois

《バレエとフィギュアに捧げる舞踊組曲 2》

上野水香 × 町田樹 × 高岸直樹

東京文化会館 小ホール 2025年 4月 26日(土) 開演16:00 27日(日) マチネ開演11:00 ソワレ開演17:20

Program

プログラム

I *Joie de vivre* 生きる喜び

- 《エオリアンハーブ》 出演：上野水香・町田 樹・高岸直樹
ショパン Étude, Op.25 No.1 (1836) 演奏：ツヴィ・エレッツ 振付：高岸直樹
- 《楽興の時》 出演：上野水香
シューベルト／ゴドフスキー編曲 Moments musicaux, D.780 No.3 (1828) 演奏：今井 颯 振付：町田 樹
- VTR 《プレリュード》 出演：高岸直樹・町田 樹
ドビュッシー Prélude dans Suite Bergamasque (c.1890) 演奏：モニク・アース 振付：高岸直樹
- FS 《チャーリーに捧ぐ》 出演：町田 樹
プッチーニ O mio babbino caro (1918) 演奏：青柳呂武、小幡華子 振付：町田樹

II *Fryderyk* フレデリク

- ※ 《ノクターン 17番》 出演：上野水香・高岸直樹
ショパン Nocturne, Op. 62 No.1 (1846) 演奏：反田恭平 振付：高岸直樹
- FS 《別れの曲》 出演：町田 樹
ショパン Étude, Op.10 No.3 (1832) 演奏：ツヴィ・エレッツ 振付：町田 樹
- VTR 《ノクターン 19番》 出演：町田 樹
ショパン Nocturne Op. posth. 72 No.1 (1827) 演奏：ツヴィ・エレッツ 振付：高岸直樹
- VTR 《ノクターン 9-2番》 出演：高岸直樹
ショパン Nocturne, Op. 9 No.2 (1831) 演奏：川口成彦 振付：町田 樹
- ※ 《プレリュード 13番・14番》 出演：高岸直樹
ショパン 24 Préludes Op.28 No.13 & No.14 (1836) 演奏：福岡洸太郎 振付：高岸直樹
- ※ 《バラード 1番》 出演：町田 樹
ショパン Ballade No.1 Op.23 (c.1831) 演奏：ツヴィ・エレッツ 振付：町田 樹

III *Widmung* 献 呈

- FS 《継ぐ者》 出演：町田 樹
シューベルト Impromptu in G Flat, Op.90 No.3, D899 No.3 (1827) 演奏：今井 颯 振付：町田 樹
- 《献 呈》 出演：上野水香
シューマン／リスト編曲 Widmung, Op.25 No.1 [trans. by Liszt, S. 566] (1848) 演奏：反田恭平 振付：町田 樹

IV *Finale* フィナーレ

- ※ 《トロルドハウゲンの婚礼の日》 出演：上野水香・町田 樹・高岸直樹
グリーグ Lyric Pieces, Op.65, No.6 Wedding Day at Trolldhaugen (1896)
演奏：レイフ・オヴェ・アンスネス 振付：町田 樹・高岸直樹

※ 新作

VTR バレエ作品映像

FS フィギュアスケート作品映像

全て録音演奏／上演時間＝約70分、休憩なし

Foreword

本公演について

本公演は、〈上野の森バレエホリデイ 2025〉の特別公演です。昨年の世界初演で大好評を得た《パ・ド・トロワ》のアンコール公演となります。様々な縁を得て友人関係にある、そしてそれぞれが希有な踊り手である上野水香・町田樹・高岸直樹が、3人で再び、パワーアップした舞台に挑戦します。

《フィギュアとバレエに捧げる舞踊組曲 2》の全体を貫くテーマは、「敬愛と献呈」——。

作曲家、そして演奏家への敬愛とそれに捧げる舞踊。舞踊家どうしの敬愛と、交互に振付けて献呈する作品の数々。そして何よりもバレエとフィギュアスケートという舞踊に捧げてきた長い時間と、それによって熟達した技能と表現、それを客席に届ける夢の時間がここに 있습니다。

第Ⅰ部「生きる歓び」では、流れ、はじけ、開放される春に相応しい舞踊を。第Ⅱ部「フレデリク」では、ショパンの精神を繊細、かつ大胆に現出させる時間を。そして第Ⅲ部「献呈」では、受け渡し受け継ぐ心のありかと、舞踊へ捧げる決意と愛が溢れるでしょう。

今年は特に第Ⅱ部「フレデリク」に 3 作品の新作を加えて実演し、昨年の作品映像（加藤清之制作）と交錯させ、ショパンを背景曲として使うのではなく、「ショパンの楽曲を踊るとは何か」という新しい問いに大胆に挑戦します。祖国からの亡命と愛の軌跡、宿痾と死への恐れ、そして同時代文学への深い理解に支えられたショパンのピアノ曲は、人間の精神に普遍的ドラマを秘めています。それを2人で、あるいは1人で、また氷上で、そして舞台で踊る時間——あえて録音音源でこそ実現する、様々なピアニストたちの名演奏とのコラボレーションの時間が、ここに 있습니다。

上野水香の《献呈》、高岸直樹と上野のパ・ド・ドゥ《ノクターン 17 番》、町田樹の《バラード 1 番》は、共に超大作。満を持して技術と表現の全てを投入し、挑戦します。

そしてフィナーレでは、昨年のアンコール曲を全曲使用した新作を披露。最後は心ゆくパ・ド・トロワの友情と敬愛のパワーを全開し、今年も巡り来た上野の春を、会場の皆さまと謳歌したいと思います。



町田 樹

Tatsuki Machida

まちだ・たつき 國學院大学准教授。3歳よりフィギュアスケートを始め、2014年ソチオリンピック団体5位、個人5位に入賞。同年世界選手権で準優勝。翌年引退、研究の道に入る(院生時代にプロスケーターとして10作品を自作自演)。2015年より高岸直樹にバレエを師事。2020年早稲田大学大学院修了、博士(スポーツ科学)。現在は大学教員の傍ら、スポーツ関連番組制作、フィギュアスケート解説者および振付家として活躍。主著『アーティスティックスポーツ研究序説』(白水社)で日本体育・スポーツ経営学会賞、『若きアスリートへの手紙』(山と溪谷社)で「わたくし、つまりNobody」賞およびミズノスポーツライター最優秀賞を受賞。DVDに『氷上の舞踊芸術』(新書館、2021)、『フィギュアスケーターのためのバレエ入門』(同、2022)がある。



上野水香

Mizuka Ueno

うえの・みずか 東京バレエ団ゲスト・プリンシパル。5歳よりバレエを始め、1993年ローザンヌ国際バレエコンクールで入賞し、モナコのプリンセス・グレース・クラシック・ダンス・アカデミーに2年間留学。2004年東京バレエ団に入団。《白鳥の湖》《ドン・キホーテ》《ラ・バヤデール》などに主演し、プリンシパルとして日本のバレエ界を牽引、世界的ダンサーとの共演多数。ベジャール《ボレロ》を踊ることを許された世界でも数少ない女性ダンサーの1人。2022年芸術選奨文部科学大臣賞、2023年紫綬褒章、2024年東京新聞舞踊芸術賞を受賞。



高岸直樹

Naoki Takagishi

たかぎし・なおき 東京バレエ団特別団員兼アーティスティック・アソシエイト。1986年東京バレエ団入団、87年ベジャール振付『ザ・カブキ』にて、弱冠21歳で主役の由良の助に抜擢され一躍話題になり、1989年『ボレロ』でジョルジュ・ドンの代役を務め、大成功する。以降プリンシパルとして国内の舞台のみならず、1991年にはオーストラリア・バレエ団に3ヵ月間客演するなど国際的に活躍。2015年の退団後は「高岸直樹ダンスアトリエ」を設立、新国立劇場バレエ団、東京シティ・バレエ団、谷桃子バレエ団、洗足学園音楽大学で講師を務めるなど、精力的に後進の指導にあたっている。現在も多くの舞台に出演するほか、『兵士の物語』(2016)では演出・振付・出演を務めた。

I Joie de vivre 生きる喜び

《エオリアンハープ》 ショパン Étude, Op.25/1 (Aeolian Harp)

振付：高岸直樹

エオリアンハープとは、自然の風で鳴る古来の弦楽器。1836年、フレデリク・ショパン(1810-1849)の《エチュード》の演奏を聴いたシューマンが、「エオリアンハープのようだ」と評したことからこの題名が伝わったと言われる。実際の弦楽器は、時に不気味でもの悲しい低音が鳴るのに対して、ショパンのこの曲はあくまでも流麗、優しく温かい世界が溢れ出る。両手で分散和音を弾きながら、主に右手小指でメロディーを奏でるための「練習曲」だが、難しい技術をものともせず、美しくなめらかなツヴィ・エレツの演奏に誘われるかのように、Pas de Trois (パ・ド・トロワ)の舞踊が繰り返されるだろう。



photo: Shoko Matsuhashi

次々と現れ、時に1人で、時にパ・ド・ドゥで、そして3人が興に乗って風を巻き起こす、自由な、巧みな、幸福で光輝く時間がここに幕を開ける。

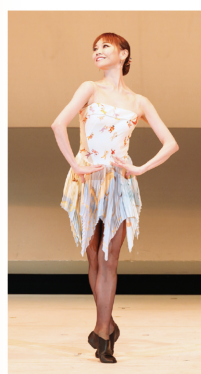


photo: Shoko Matsuhashi

《楽興の時》 シューベルト／ゴドフスキー編曲 Moments musicaux, D.780/3

振付：町田樹

フランツ・シューベルト(1797-1828)のピアノ曲として最もポピュラーな「楽興の時 第3番」(1823-1828)。それをポーランド出身のレオポルト・ゴドフスキー(1870-1938)が編曲した楽曲である。より豊かな和声が鳴り響き、今井頭による文字通り「踊り心」をくすぐるようなピアノ演奏の効果もあって、いかにも東欧的な民族舞踊を連想させる編曲となっている。町田はかつて本曲を、プロフィギュア

スケーター引退記念の作品(《そこに音楽がある限り》第1作、2018)として創作し滑った。リズムカルな曲調をステップやターンを基調とした極上のスケーティングで魅せた作品を、今回は上野水香のダンス作品として町田が再創造したのである。氷上／舞台上、それぞれの特性を活かし切る振付の工夫が凝らされる。そして快活で潇洒な舞踊にも定評がある上野水香ならではの、「楽興の時」を堪能したい。

《プレリュード》 ドビュッシー Prélude dans Suite Bergamasque

振付：高岸直樹

《ベルガマスク組曲》の第1曲。クロード・ドビュッシー(1862-1918)が青春時代、1890年頃に作曲した瑞々しいピアノ組曲であり、とりわけこのプレリュードには「生きる喜び」ともいえるべき明るさ、開放的な空気と繊細な音のたゆたいが満ちあふれている。

第1小節からいきなり最高潮の喜びが爆発するため、踊り手のエネルギーを要する難しさがあり、舞台でも氷上でもこれまで舞踊化された形跡がない(同組曲・第3曲「月の光」は、度々舞踊で使用されるのに比して)。ドビュッシーは、ロマン派より後の20世紀の作曲家に分類され、自由な音色や感覚の印象的なひらめきが随所にあるため、

舞踊も自由な発想で対応出来る。聴くと明白のように、同じパート内でも何度か同じフレーズのリフレインがあり、その様相は、2人の踊り手がリフレインをしながら自由に交差する様と連動するであろう。高岸直樹、町田樹の双方とも、身体の明るさと明快な身体動作を得意とし、その切れの良さでモニク・アースの演奏を最高度に表現している。



photo: Shoko Matsuhashi

《チャーリーに捧ぐ》 プッチーニ O mio babbino caro

振付：町田樹

誰でも著作権許諾を得ずに自由に滑ることができる、初心者のためのフィギュアスケートのプロジェクト(町田樹「エチュード・プロジェクト」)の初回を飾る作品。「チャーリー」とは、あのスヌーピーの原作者チャールズ・シュルツと、フィギュアのトールブジャンプの古名(チャーリー)にちなみ、二重にかけてオマージュを捧げる作品である。

シュルツの短編アニメーション映画(1980年)では、プッチーニの名曲《私のお父さん》の美しいメロディーに乗せて、主人公ペパーミ

ント・パティが青いお気に入りの衣裳で伸びやかに滑る。途中テーブルレコーダーが壊れてしまった危機一髪を救った、ウッドストックの口笛演奏が、何と心に沁みることか——今回の音源は、世界的演奏者である青柳呂武の口笛と、ハープ奏者の小幡華子によるオリジナル演奏。様々な敬愛の情が交差する愛すべき小品を、加藤清之による美しい映像でご覧頂こう。

II Fryderyk フレデリク

《ノクターン 17 番》 ショパン Nocturne Op.62 No.1

振付：高岸直樹

ショパンが生前に発表した最後の夜想曲。作曲された1846年、ショパンはジョルジュ・サンドとの10年に及ぶ恋愛に終止符を打ち、持病も悪化していることを自覚。精神的に孤独な状態であったと言う。しかし本曲では（反田恭平の卓越した演奏により）、一貫して心に染入るような旋律が響き渡り、決して悲惨な感じはなく、むしろ夢見心地である。そして一方で、何か「実態が掴めないもの」を追い求めるような、仄かな哀しみも感じられる。この夢幻性をとらえ、本舞踊作品ではそこに「胡蝶の夢」という裏テーマを掛け、上野・高岸によるパ・ド・ドウで描く。

舞踊中では抽象化された「男の魂」を高岸が演ずる。男は過去の「幸福」に連なる記憶——家族、友人、初恋、そして運命の人との愛を夢想する。この記憶こそ、男にとっては生きる《希望》そのものだった。その希望を「蝶」の姿に仮託し、上野が舞う。蝶はときに、男の内に

残る「運命の人」の幻影とも重なり、愛することを男に思い出させる。だが同時に「蝶」は、死の予兆でもある——。元来「胡蝶の夢」とは、中国の思想家・莊子（紀元前43世紀）に係る伝説。莊子は夢の中で、自身が蝶として飛んでいたところ、はたと目が覚める。果たして自分は胡蝶となったのか、それとも夢で見た蝶こそが本来の自分で、今の自分は蝶が見ている夢なのか——と自問したという。そこから転じ「胡蝶の夢」とは、「夢と現実の境が判然としないこと」の譬えや「この世の生のはかなさ」も意味する慣用句となった。高岸演ずる男の魂は、眩暈のような感覚の中で、次第に現実感を失ってゆく。全てこの世の出来事はうたかたの夢。ついに夢と現実の境目がわからなくなり、男は深い眠りの底に落ちてゆく。

《別れの曲》 ショパン Étude, Op.10/3

振付：町田樹

よく知られるこの題名は、ショパン自身の命名でなく、1934年の欧州共同映画の題名から人口に膾炙したという。短い曲ながら4パートに分かれ、A-A-B-A' という構造を持っている。ここには「別れの哀しみ」が「激情」に至り、やがてそれを包み込んで「追憶」する——という心理の劇が鮮やかに描き込まれる。ツヴィ・エレッツは第1パートから第4パートへと変幻する様を繊細に弾き分けており、町田はその原曲の構造とテーマを大事に、フィギュアスケート作品を創造した。元は4名

のスケーターがコラボする作品（2020）、そして自作自演の映像作品（2022）を公開した。バレエやフィギュアスケートなどの舞踊では、音楽という媒体を使う以上、それを「受けて」、「二次創作」とするという意識を忘れるわけにはいかない。楽曲への理解は創って演奏した人々への敬意であり、踊る人は、音楽に内在するテーマや心理の劇を理解した上で、さらに自分の想像力をそこに加えて「視覚化（ヴィジュアルイズ）」するのである。

《ノクターン 19 番》 ショパン Nocturne in E minor, Op. posth. 72/1

振付：高岸直樹

本作品は1827年、ショパンが17歳で作曲。友人のユリア・フォンタナが彼の死後に発見し世に出した。1827年4月、ショパンは2歳年下の妹エミリアを結核で喪っている。飛び抜けた文学的才能を示したエミリアは、その将来が期待されていた。それだけに、わずか14歳で逝ってしまった妹の死は、彼の人生に深い翳を残したと言われている。だがショパンの人生をあえて投影しなくても、そこにあるのは「哀しみ」や「悔悟」の念を想起させる旋律。しかし最終部では転調によって「光」を見出し、「超克」し「浄化」される魂が表される。

今回は、川口成彦によるプレイエル社製の古楽器（1842年製）の演奏。まさにショパンが愛した当時の音色であり、その繊細な演奏が深い詩情世界に誘うだろう。現役スケーター時代に「悲劇名詞」と自らも称し、「哀しみ」の表現を得意とした町田樹。その本領発揮の作品を、満を持して師である高岸が彼のために振付けた。



photo: Shoko Matsushashi

《ノクターン 9-2番》 ショパン Nocturne, Op. 9/2

振付：町田 樹

ノクターン全 21 曲の中で最も有名な作品。1830 年 11 月、ポーランドは武装蜂起するが、ロシアの鎮圧に敗れ祖国は荒れ果てた。革命の直前に故郷を離れウィーンにいた 20 歳のショパンは、「神を恨む」とまで慟哭したという。その苦境の中でこの美しい旋律は生み出された。従来の舞踊化では、甘やかなパド・ドゥや妖精を彷彿とさせる女性群舞が多い。

実は町田はこの曲を舞踊化するにあたり、学生ダンサーたちが性別なくソロで踊れるようにはじめ創作した（2018 年）。だが創り込むうちに「成熟した男性の内面」を映す作品となる可能性に気づき、これを高岸に献呈するに思い至った。冒頭より印象的に繰り返される「追想」の旋律。そこに寄り添いつつも、時に破綻するムーヴメント。最終部では何かに突き動かされる激情が進る。そしてコードで奏でられる「教会の鐘」の中で、男は何かに決別し、未来へと歩み出す。

微かな翳りを映し出すツヴィ・エレットの名演と共に、高岸直樹の円熟した舞踊が光る。



photo: Shoko Matsuhashi

《プレリュード 13番・14番》 ショパン 24 Préludes Op.28 No.13 & No.14

振付：高岸直樹

高岸が踊る本ソロ作品のために今回、《24の前奏曲集》より曲想の異なる 13 番（前半）・14 番（後半）の 2 曲が取り出され、一体のものとして編まれる。しかもこの「前奏」が本公演においては、次に町田樹が踊る《バラード 1 番》のまさしく「予兆」となるように位置づけられている。

ショパンは、尊敬する J・S・バッハ《平均律クラヴィーア曲集》から多大な影響を受けて《前奏曲集》を書いた。1838 年にマヨルカ島で完成したと言われるが、曲の全体像はパリを立つ前にすでに見えていたらしい（ジョルジュ・サンドとの恋愛が始まって間もない頃で、サンド一家と赴いたマヨルカ島への旅は、実はサンドとの逃避行を意味した）。13 番と 14 番は著しく対比的な趣を帯び、福岡 洸太郎の演奏は大変に抽象度が高く気高い。

13 番の曲想は一貫して優しく、左手で奏でられる分散和音は一定の

リズムを刻み、舟歌や夜想曲のイメージが加味されている。そして中盤からは牧歌的な「郷愁」が漂いつつも、微妙な人生の「翳り」や「悲哀」をたたえ、深い響きの中で 13 番は閉じられる。一転して 14 番は、遠雷がこちらに近づいてきたかと思いきや、疾風のように過ぎ去っていくような、わずかに 34 秒の楽曲。自然現象を想わせるが、人間心理の普遍的な「闇」を描写していることは疑いない。この演奏で福岡は、あたかも嵐を聴くがごとく、メロディーライン上に揺れ幅のある音の波を、絶妙に作り出している。最終結部は、中途半端に何か「突然に終わる」あるいは「消える」という不気味さがあり、この劇的な「不安感」を残して舞台は突然暗転——本公演では、次の《バラード 1 番》の心理劇へと続いていく。

《バラード 1 番》 ショパン Ballade No.1 Op.23

振付：町田 樹

21 世紀に入り、日本におけるショパン演奏家の質はますます高まっているのみならず、ショパンの人生と楽曲をめぐる学術研究もまた、飛躍的に前進している。ショパンの全書簡の邦訳（関口時正他訳、岩波書店）によって、単にロマンティックで繊細というだけでなく、機知や辛辣な批評精神が横溢するショパンの人格が再確認された。また同時代詩人たちと旺盛に交流し、ポーランド文学で新たに生み出された詩的ジャンルの構造に匹敵するピアノ曲を創造した詳細が、追究されている（松尾梨沙『ショパンの詩学』みすず書房、2019 年）。

音楽の世界において「バラード」というジャンルを実質的に確立したのはショパンであることはよく知られている。興味深いのはこれがまさしく、同時代ポーランド詩人たちが伝統的歌謡を発展させたジャンルであったということである。ポーランド文学の「バラード」の構造をショパンは知的に感受し、自身の楽曲へと練り上げた——ショパンの 4 つ

のバラードには共通して叙事詩的な語り手が存在し、何か非日常的出来事が語られるが、語り手自身は徐々にその出来事に巻き込まれ、叙情や激情の渦が巻き起こる——その構造こそが命である。ショパンのバラードを弾く者も、聴く者も、何か特定の詩人や詩句と直接結びつける必要はない。となればショパンを踊る者もまた、19 世紀ポーランドの詩人と音楽家が熟成させたバラードの文学的構造を理解した上でなら、その音楽の視覚化に自由に取り組むことができるのではないかと——町田樹の振付はそこから出発している。

パリに亡命したショパンが書いた《バラード 1 番》(1831 年初稿か)には、のちの 3 曲に通じるリズム、主題のあり方、楽曲の構造がすでに明確に確立されている。日本でも最も人口に膾炙したこの 1 曲を聴き込み、9 分強という（ソロの舞踊としては異様に長い）上演に、町田は渾身の力で挑戦する。

III

Widmung 献呈

《 継ぐ者 》 シューベルト Impromptu in G Flat, Op.90/3, D899/3

振付：町田 樹

フランツ・シューベルト（1797-1828）の「4つの即興曲」作品 90 第3曲を使用。2014 年末フィギュア選手を引退した町田が自作自演した、プロ転向第1作である。原曲を編集せず使用し、フィギュアでは異例の6分間超えで、6種類全てのジャンプも組み込んだ作品は、大反響となった。今回は未公開の演技映像（2015 年5月5日収録、プリンスアイスワールド提供）を特別上映する。

町田は、この作品が奇しくも、ベートーヴェンの死去した 1827年に

作曲されたことにも言及し、「人から人へと連なる、過去へも未来へも永遠と続く、その連綿たる連鎖の中に存在すること——先人たちが辿った軌跡と、未来を形成する者たちに思いを馳せ、《継ぐ者》を制作」した。2023 年5月、音源の演奏者・今井顕は、ここ東京文化会館小ホールでコンサートピアニストとしての活動に終止符を打った。「この作品には、今井先生の演奏以外あり得ませんでした」と、町田は感謝の念を込めてそう語っている。

《 献 呈 》 シューマン原曲／リスト編曲 Widmung, Op.25/1 [trans. by. Liszt, S. 566]

振付：町田 樹

ロベルト・シューマン（1810-1856）の原曲「献呈」は、歌曲集《ミルテの花》作品25の第1曲目。原曲の詩はドイツ・ロマン派の詩人フリードリヒ・リュッケルトによる。この作品は妻クララへ結婚式前日に贈られたという逸話がある。フランツ・リスト（1811-86）編曲によるピアノ独奏版《献呈》は、原曲を内包しつつもリストの技巧的かつ豪華なパッセージによって、特に終盤では、心の内から溢れ出てくるかのような「想いの丈」が高らかに奏でられる。それを十全に表現する反田恭平の演奏が圧巻である。

最終部のシューベルト「アヴェ・マリア」（1825）の旋律では、シューマン＝リストの敬愛の念も喚起される。原詩の冒頭「きみこそはわが魂よ、わが心よ」（志田麗訒）という一文にも導かれ、町田は本曲から普遍的な「献呈」の精神を引き出した。近年身体芸術の極みを示し続けている上野水香が、「舞踊への愛と献呈」を本公演の最後に謳いあげる。



photo: Shoko Matsushashi

IV

Finale フィナーレ

《 トロルドハウゲンの婚礼の日 》

グリーグ Lyriske smastykker No.8 “Bryllupsdag på Trolldhaugen” Op.65/6

振付：高岸直樹・町田 樹

エドヴァルド・グリーグ（1843-1907）といえば《ピアノ協奏曲イ短調作品16》が特に有名であるが、全66曲から構成される〈抒情小曲集 Lyriske smastykker〉に含まれる、《トロルドハウゲンの婚礼の日》（1896 年）も、グリーグ作品のなかで極めて人気の高いピアノ曲である。「トロルドハウゲン」とは、グリーグと彼の妻ニーナが暮らしていた場所のこと。ノルウェー第2の都市ベルゲン（Bergen）の南方にある。フィヨルドを見渡す岬に建てられた館で、没するまでの 22 年間でグリーグは過ごしたという。現在でも資料館として館は存在しており、その居間には 1892 年製モデル B のスタインウェイが置かれている。今回の舞踊化にあたっては、このピアノで演奏されたレイフ・オヴェ・アンズネス（ノルウェー、1970-）の音源を使用。まさにグリーグが愛し、演奏したピアノの音色で、アンズネスは緩急自在に演奏している。



photo: Shoko Matsushashi

本曲はグリーグ夫妻の結婚 25 周年を祝って作曲されたというが、初めて聴いた人でもそのメロディはなぜか懐かしく、また何度でも繰り返し聴きたくするような不思議な魅力がある。見知らぬ田舎町の、誰かの結婚式に紛れ込んだかのような、飛び切りの幸福感。思わず踊り出してしまう曲想そのままに、高岸・町田が客席に降りて観客を誘うと、おそらく誰もが微笑むことであろう。原曲は大きく3つのパートに分かれ、甘くゆったりとした中間部を、3人がソロでしっかりと踊る。そして曲が再び最高潮に達する瞬間に、絶品のジャンプと共に上野が再び登場すると、会場は完全な祝祭空間へと変貌する。その幸福感を湛えたまま一気にステージの幕は降りる——次に再び会えるその時まで、この幸せが続くことを願いながら……。

Pas de Trois Encore 2025 : バレエとフィギュアに捧げる舞踊組曲 2

主催 公益財団法人 日本舞台芸術振興会

特別協力 株式会社 新書館

衣装提供 チャコット株式会社

映像提供 株式会社 新書館

プリンスアイスワールド

後援 一般社団法人 日本バレエ団連盟

協力 公益財団法人 東京都歴史文化財団 東京文化会館

監修・構成 Atelier t.e.r.m

振付 高岸直樹

町田 樹

演出 高岸直樹

上野水香

町田 樹

映像 加藤清之（グランシエルピクチャーズ）

舞台 ニクステージワークス

音響 大橋正幸（オルフェオ）

照明 本江加奈（劇光社）

ヘアメイク 星野安子

音源編集 矢野桂一

制作 公益財団法人 日本舞台芸術振興会

宣伝写真 難波雄史

宣伝衣装協力 ISAlA、Sportmax

宣伝写真ヘアメイク 猪狩友介（Three PEACE）

パンフレット制作 株式会社 新書館

構成・執筆 ©Atelier t.e.r.m

デザイン SDR（新書館デザイン室）

発行日 2025 年 4 月 26 日

音源

- 《エオリアンハーブ》ショパン Étude, Op.25 No.1 (1836)
Tzvi Erez, Chopin Études, NiV Classical
- 《楽興の時》シューベルト／ゴドフスキー編曲 Moments musicaux, D.780/3 (1828)
今井 颯, Akira Imai plays Schubert, ナミ・レコード [NWCC7338]
- 《プレリュード》ドビュッシー in Suite Bergamasque (c.1890)
Monique Haas, 月の光：ドビュッシー・ピアノ名曲集, Warner Music Japan [WPCS-4621/2]
- 《ノクターン》ショパン Nocturne, Op.62/1 (1846)
反田恭平：凱旋コンサート サントリーホールライブ（Kyohei Sorita, Triumphal Concert, Suntory Hall Live, 2022）Nova Record [NR-02202]
- 《別れの曲》ショパン Étude, Op.10 No.3 (1832)
Tzvi Erez, Chopin Études, NiV Classical
- 《ノクターン》ショパン Nocturne in E minor, Op. posth 72 No. 1 (1827)
川口成彦, F. Chopin: Nocturnes & Short Pieces, Acoustic Revive [AR1006]
- 《ノクターン》ショパン Nocturne, Op.9 No.2 (1831)
Tzvi Erez, Tzvi Erez plays Chopin, NiV Classical [NiVCD00021]
- 《プレリュード》ショパン 24 Préludes Op.28/13,14
福岡光太郎, Chopin Legacy (Kotaro Fukuma, 2017) Ars Produktion [ARS 38 237]
- 《バラード 1 番》ショパン Ballade No.1 Op.23
Tzvi Erez, Tzvi Erez plays Chopin, NiV Classical [NiVCD 00021]
- 《継ぐ者》シューベルト Impromptu in G Flat, Op.90/3, D899/3 (1827)
今井 颯, 個人蔵音源
- 《献呈》シューマン／リスト編曲 Widmung, Op. 25 No. 1 [trans. by Liszt, S. 566] (1848)
反田恭平, Clair de Lune Recital Pieces Vol.1 (Kyohei Sorita Piano Recital 2017), Denon [COCQ-85364]
- 《トロルドハウゲンの婚礼の日》エドヴァルド・グリーグ Lyric Pieces, Op.65, No.6 "Wedding Day at Troldehaugen"
レイフ・オヴェ・アンズネス, グリーグ：抒情小曲集（抜粋）, Warner Music Japan [WPCS-23157]

映像出典

- 《別れの曲》
新書館提供、「町田 樹 フィギュアスケーターのためのバレエ入門」新書館 [DD22-0902]、2022 年
- 《継ぐ者》
プリンスアイスワールド提供、プリンスアイスワールド 2015 横浜公演（5 月 5 日第 2 公演収録）

公演アンケートのお願い



このたびはご来場ありがとうございました。
公演についてのご感想をこちらの Web フォームから
ぜひお寄せください。

<https://questant.jp/q/PasDeTroisEncore2025>

《Pas de Trois Encore 2025》公演記念グッズ 当会場にて販売中！



♥ミニタオル
¥1,300



♥ルイボスティー
¥1,500

《Pas de Trois 2024》グッズも
会場限定にて特別販売いたします

価格は税込です。
数量限定にて品切れの場合はご了承ください。
画像はイメージのため、実際の商品とはデザインが一部異なる場合がございます。



♥クリアファイル
¥900



♥A2 ポスター ¥5,000
出演者 3 人の直筆サイン入り
（画像はサイン前のものです）